連載⑥

内海善雄（ITU前事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

神への挑戦、自動翻訳電話の実現

世の中を根底から変える

iPadが上陸して、「もしかすると電子出版が本物になるのでは」と出版業界は戦々恐々である。

ラップトップのダイナブックが、PCを机の上の機械から個人必携の道具に変えたように、タッチパネルのタブレットは、その利便性からPCの新しい利用方法を生み出すにちがいない。電子書籍や電子新聞として利用するというのも、その一つだ。出版業界や新聞業界は一変するかもしれない。これは社会に大きな影響を与えるが、しかし、それだけでは世の中がひっくり返るというほどのことでもあるまい。

本当に世の中を根底から変えてしまうICT（IT）とは、「自動翻訳電話」の実現であると思う。それは、子供の頃に読んだSF物語の中に出てきた宇宙人の不思議な小箱である。小箱は宇宙人の話す言葉を日本語に通訳し、日本語は宇宙人の言葉に通訳する。

天まで届くバベルの塔の建設を試みた人類は神の怒りに触れ、統一言語を失った。神は人間が大それたことをしないようにするため、異なる言葉をつくって意思の疎通を混乱させたのだという。宇宙人の不思議な小箱は、もしかすると神の意思に反するものであるかもしれない。

NECや担当大臣の熱意

私は一九八四年、電電公社の民営化に際して、国が保有する株式の膨大な売却益の一部を自動翻訳電話の開発に回せるよう奔走したことがある。

当時、機械翻訳の研究を行っていた京都大学の長尾真教授（後に京大総長、現国会図書館長）にお聞きすると、「完全なものはできないかもしれないが、繰り返して話す、あるいは違う言葉を使ってみるなどすれば、翻訳ができる。そうすれば大変便利になる」と大いに励まされた。

ところが、お世話になっていた郵政省の電気通信審議会の委員である著名な学者に、「自動翻訳電話の開発は不可能なことが証明されている」と反対された。「研究開発予算の獲得のためだから、審議会では反対だけはしないでください」と懇願したが、「不可能なことが分かっているものを国が行うのは駄目だ」と審議会で発言され、往生した。

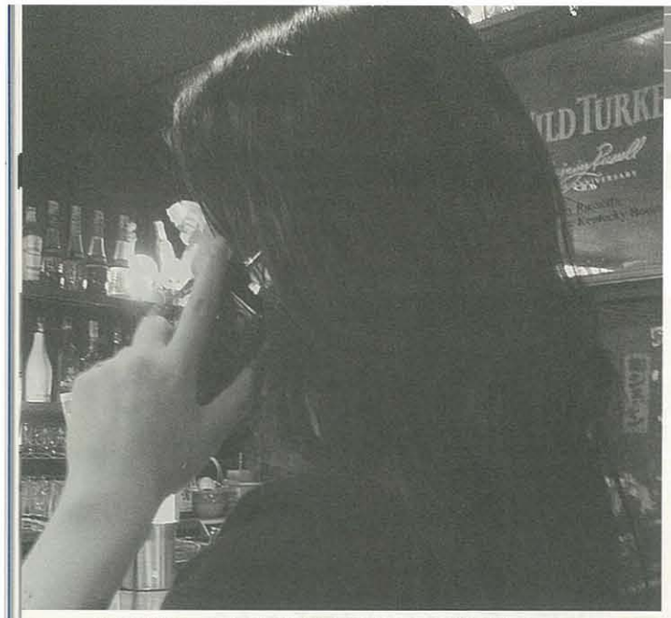
当時は電気通信の自由化で役所はきわめて多忙、担当できる適任者がいなかったので、無理だろうと思いつつ、入省したばかりのまったく未経験な一年生に勉強会を組織することを命じた。やりがいを感じた彼は主査となった長尾教授の下で懸命に働き、たった数カ月で立派な開発計画書を作り上げた。この一年生、中村一也君は、現在、慶応大学の教授として活躍しておられる。

ちょうどその時、フランスのカンヌで開催された国際会議に奥田敬和・郵政大臣が出席されることになった。私は大臣に「世界に向かって自動翻訳電話の共同開発を呼びかけてはいかがか」と提案した。大臣は「そんなものが本当にできるのか？」と尋ねられたが、即座に「やろう」ということになった。さすがは政治家である。現地のホテルで徹夜で練習をして、英語でスピーチされた。

カンヌ会議から数週間後であったが、NECの小林宏治会長（当時）に業界として応援をいただくべく、お願いに参上した。その時、小林会長は、

「自分は、C&C（コンピューター・アンド・コミュニケーション）を提唱して、現在、NECのキャッチ・フレーズとなっているが、その究極の姿が自動翻訳電話である。何とか生きているうちに日の目を見たいが、不可能かもしれない。ところで、ドイツでテレビを見ていたら、奥田大臣が自動翻訳電話を開発すると演説しているのが放映され、驚いた。なんと大臣が自分の夢を語ってくれていた」と、応援を約束してくれた。

このような方々の熱意を得て、最終的には、政府資金を元に開発拠点として関西研究学園都市に国際電気通信基礎研究所（ATR）が設立された。



相手は英語、こちらは日本語で会話できる時代が来る

必要な技術は飛躍的に発達

そして四半世紀が過ぎた。いまだに実用になる自動翻訳電話は実現していない。よって、日本人は外国人と対等に交渉することができず、子供や孫たちはまだまだ外国語の勉強に大変な苦労をしている。もしかすると著名な学者の言のように開発は不可能なことかもしれない。しかし、自動翻訳電話実現のために必要な技術は飛躍的に発達した。

まず、音声の自動認識は、静かな環境であれば、ほぼ完全にできるようになっている。NHKニュースは即座に自動認識されて、ほとんど人手による修正なしに、聴覚障害者のために字幕となって表示されている。

翻訳技術も格段に進歩した。時間が勝負の市況ニュースは、すでに機械翻訳によって完璧な英文となってリアルタイムで外国に流れ、また、日本語となって日本に流れてきている。

小林会長がご存命の時は、四年に一回開かれるITUのテレコム展示会で、NECが必ず音声の自動通訳を会場でデモしたが、回を重ねるごとに能力が向上していった。

EUでも機械翻訳が真剣に研究され、すでに事務局の翻訳業務の一部がコンピューターで行われているという。二十七カ国で構成されているEUでは、各国言語が平等に扱われ、予算の大半が翻訳や通訳に使われているため、翻訳業務の合理化は最大の課題なのである。

翻訳電話に必要なこれらの要素技術は各分野で商品化され、身近に活用されている。例えば、車の音声ナビ、PCの音声入力、Webの翻訳サービスなどである。

このように四半世紀の間に周辺技術は飛躍的に発展した。しかし、話し言葉の曖昧さが最大のネックとなって、実用的な自動翻訳電話はまだ開発されていない。神の意思に挑戦することの前には、想像を絶する障壁が立ちはだかっているのである。この自動翻訳電話が出現した時こそ、人類が、国により民族により言葉が通じないという神の罰から解放されることができ、世界が変わる時なのである。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市出身。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省入省。98年国際電気通信連合（ITU）事務総局長就任。現在、財団法人「通信・放送コンサルティング協力」理事長。